文藝春秋 SPECIAL

BUNGEISHUNJU 2016 夏

宮之×佐藤優
大日本史

総力特集 中国滅亡への法則

この一冊でまるわかり
巨大帝国衝撃の真実

パナマ文書を超える!
共産党極秘流出ファイル

ドキュメント
ドラフvs.習近平

大日本史 第二回

西郷と大久保はなぜ決裂したのか

維新政権のトップたちが世界から学ぼうとした岩倉使節団。盟友が袂を分かった征韓論争。ダイナミックな明治初期を論じる

山内昌之
明治大学特任教授・東京大学名誉教授

佐藤 優
作家

山内　近代日本を世界史の流れでみていくとき、明治初期は、複数の大きな転機を迎えた重要な時期でした。明治後期になると、日本は日清戦争、日露戦争といった、世界史を大きく変える戦争に関わっていきますが、そこに至る諸問題は、明治初期にすでにあらわれている。

佐藤　年表をたどるなら、明治と年号が改まり、翌二年に戊辰戦争が終結、版籍奉還がなされます。そして明治四年に、廃藩置県の断行、日清修好条規の締結、岩倉使節団が派遣される。まさに大きな節目ですね。

山内　ことに岩倉使節団は、特命全権大使の岩倉具視以下、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文といった維新政府の首脳陣が二年近くも米欧に外遊するという、極めて特異なプロジェクトでした。

佐藤　革命政権のトップが革命後まもなくこぞって国を空けること自体、あまり例がないのではないですか。

山内　それは非常に重要な論点ですね。お忍び洋行として知られる十七世紀ロシアのピョートル一世によるアムステルダムでの船大工修業や、イランのカジャール朝のナーセロッディーン・シャーによる十九世紀後半の三回の訪欧旅行は、後進国のキャッチ・アップへの努力の例ですが、岩倉使節団はまったく違う。使節団が帰国した明治六年、留守政府を仕切っていた西郷隆盛が朝鮮政策を巡って下野するという大問題も起きる。それが明治十年の西南戦争につながっていく。ここまで含めて、岩倉使節団のインパクトを考えるべきでしょう。

従来の政治史の文脈では、黒船来航から西南戦争あたりまでを「明治維新」として扱ってきましたが、私は近代国家の形成という点では、明治十四年までをひとつの区切りとする一部学界の見方に賛成したいと思います。

この年、憲法制定論議をめぐって、立憲君主制のプロシア型を支持する伊藤博文と、議院内閣制のイギリス型を推す大隈重信が対立、大隈の一派が政権から追放されます。いわゆる明治十四年の政変です。この年は同時に、国会開設が約束され、国営企業が民営化へ舵を切った年であり、財政面では、松方デフレが始まり、金融の要となる日本銀行が開設された年でもある。

佐藤　つまり、憲法、議会、中央銀行、民間経済といった近代的な国家の形が、この時期に立ち上がってくるわけですね。そこでもうひとつ重要なのは、明治十二年の琉球処分です。これは沖縄を日本の国家体制の中に取り込んだばかりでなく、その後の朝鮮や台湾、中国との関係とも深く結びついていく。

山内　幕末以来の変革期から、内外政策に均衡のとれた安定期に入っていく。それが明治十四年なのですね。

岩倉使節団はどのくらいの費用を使ったのか？

佐藤　そこで明治四年の岩倉使節団を論じたいのですが、少し変わった切り口から入ってみましょうか。

それはお金です。岩倉使節団は使節四十六名、随員十八名、留学生四十三名、総勢百七名という大所帯で、アメリカに約八カ月、英国、フランス、ドイツ、ロシアなど欧州十二カ国をまわり、インド、シンガポール、上海を通って一年十カ月後に帰国しています。そこで、気になるのは、彼らはどのくらいの費用を使ったのか。というのは、当時の日本は、国家としてはまだ非常に弱い状態にありました。財政的にもとても余裕があるとは思えないのに、当時の資料をみると、使節団の人たちはほぼ青天井のお金を持っているという印象なのです。

山内　外交官の佐藤さんらしい着眼ですね。旅費に関しては、使節団に同行した久米邦武の『特命全権大使米欧回覧実記』によると、およそ五十万ドル。

明治政府は、この明治四年に金本位制に基づく新貨条例を定めています。かつての一両を一円に改め、かつ一円＝一米ドル、一ポンド＝五円と定めています。貨幣価値の比較は難しいのですが、米価などの推移をもとに計

やまうち　まさゆき　1947年生まれ。東京大学学術博士。2012年東京大学教授を退官し、現職。著書に『中東国際関係史研究』（岩波書店）、『幕末維新に学ぶ現在』（中央公論新社）、『歴史という武器』（文春文庫近刊）など多数。

算すると、大ざっぱにいって当時の一円は今の二万円、つまりいまだと百億円くらい。当時の国家予算が約三千三百九万円ですから一・五%をあてたことになります。このあたりは、田中彰氏の研究にも詳しいところです。

佐藤　しかも、当時はまだ貨幣経済が浸透していないから、いまよりも皮膚感覚ではもっと大きなはずです。

私の経験から推測できるのは、岩倉使節団があれだけの仕事を残したのは、相当金をばらまいたからに違いないということです。いま東京に駐在する主要国のインテリジェンスオフィサーは一人あたりだいたい年間三千万円の予算枠を与えられています。基本的には三千万円を、細かい決裁をとらずに個人の裁量で使っていい。特別なオペレーションの場合には、また別途与えられる。情報関係で一定の仕事をしようとすると、どうしても費用がかかってしまう。これは私の外務省時代の経験からも言えることです。

山内　久米邦武の記述で興味深いのは、使節団がニューヨークに行ったときに、高杉晋作のいとこを名乗る南貞助という男の周旋でアメリカ人から投資話をもちかけられるんですね。ところが、その投資は関係会社の火事などで失敗してしまった。結局、金を預かっていた田中光顕が反対したので、旅費の五十万ドルは無事だったのですが、何人かは個人で投資して、資本主義の冷酷な詐欺・騙しの手口をいやというほど知らされた（笑）。女道楽に縁遠い久米自身もそのひとりで、百ポンドをすってしまいます。このとき、木戸孝允は「白はぎに見とれもせぬに百ポンドとんと落したる久米の仙人」とからかったらしいが、今に換算すると一千万円もの被害にもなる。

佐藤　個人レベルでもそれだけの金を用意していった、ということですね。

山内　使節団が泊まったホテルをみても、ロンドンならマジェスティックホテルなど、ファーストではなくもうひとつ上のデラックス・ホテルに泊まっています。

佐藤　おそらく使節団に「安いホテルに泊まるとなめられるぞ」とアドバイスしてくれる人間がいたのでしょう。これは外交の世界の常識なんですね。たとえば、いまアメリカに出張してホリデイ・インあたりに泊まったら、外交官としてはもうアウト。相手方は、泊まるホテル、使うレストラン、身なりなどで「格」を判定しますから。だから、いま東京にいるインテリジェンスオフィサーは、肩書は二等書記官でも、昼食は平気でニューオータニやオークラを使っていますよ。

山内　使節団に進言したのは、幕末にすでに欧米でさまざまな交渉に当たった旧幕使節経験者でしょうね。たとえば福沢諭吉などは幕末期に欧米へ三回行っています。先人たちが身にしみて体験した欧米での差別的な扱いが、岩倉使節団に生かされたのでしょう。いまの舛添都知事の「豪遊」の言い分とは少し違う（笑）。

実際、書記官として派遣された田辺太一や福地源一郎（桜痴）、林董三郎らの書記官の面々は、みな幕臣として海外を経験しています。田辺は横浜鎖港を目指す文久四年の遣仏使節団の一員で、維新後も日清外交などで活躍、文久元年の遣欧使節団に参加した福地はジャーナリストとしても名を馳せ、慶応二年の英国留学組の林は後に日英同盟の立役者となる林董（ただす）です。幕府の分厚い人材が、明治政府を実務面でいかに支えたかをよくあらわしています。

佐藤　まさに外務省に入ってすぐに教えられるのが、こうしたお金の使い方なんですね。私は外務省に入って二年目、一九八六年に初めてイギリスに赴任したのですが、「ホテルは大使館で指定する」というのです。そして、指示されるがままに、メイフェアーのフレミングスホテルというところに行くと、これが一泊二百八十ポンド、八万円もする。当時、私の初任給が八万四千円です。腰を抜かして、こんなところには泊まれませんと大使館に言うと、君は焦げ茶色の外務省のパスポートを持っているんだろう、日本国を背負っている、費用は外務省が出しているから、みっともない振る舞いはするな、と。

山内　なるほど、それも含めて職業教育なんですね。私もパリでジョルジュサンクというホテルに泊まったことがあります。カイロから着いてパリ空港のコンシェルジュに紹介されて行ってみたら、びっくりするような高級ホテルで、よくよく聞いてみたら、私がフランス語の数字を聞き間違えていた（笑）。後には引けませんからそのまま泊まりましたが、いい勉強になった。その国を多面的にみる視角が広がったように思います。

佐藤　それは重要ですね。外務省でも、その後、語学学校に通わせるときには、ホテルから通わせずに、中産階級の家にホームステイさせるんです。その意味では、よく考えられたプログラムなのですが、その原型は岩倉使節団にあったわけですね。

「開発独裁」と維新政府の違い

山内　いま振り返っても岩倉使節団というのは大胆な試みだった。まだ草創期にある国家で、二年近くも主要指導者がいなくなる。そのおかげで、大久保利通、伊藤博

さとう　まさる　1960年生まれ。同志社大学大学院神学研究科修了後、外務省に入省。著書に『国家の罠』（新潮文庫）、『世界史の極意』（NHK出版新書）、『大世界史』（共著・文春新書）など多数。

文という近代化を主導するリーダーが、得がたい知見、体験を持ち帰るのですが、なぜそれが可能だったのか。

戦後、アジア諸国が経済的な発展をみせ、「アジアの奇跡」と世界を驚かせました。このとき、成長の鍵は強いリーダーシップにあるとする「開発独裁」論が盛んに唱えられ、明治維新こそ、その嚆矢であると論じられました。しかし、これは正確とはいえない。台湾の蔣介石と蔣経国、中国の鄧小平、シンガポールのリー・クアン・ユー、マレーシアのマハティールなど、アジアの開発独裁の特徴は大きく六つ挙げられます。

第一は国内外の危機を契機として成立したこと。第二は強力な一人のリーダーの独裁的リーダーシップ。第三にそれを支えるエリート集団、第四に開発イデオロギーの存在。そして第五は必ずしも民主的手続きではなく、経済成功で独裁を正当化しており、第六にその体制が数十年続いていること。

しかし、これを明治維新と比べると、第一の国内外の危機以外には、ほとんどあてはまらない、と大野健一氏や坂野潤治氏は述べています。一人のカリスマによる上意下達の独裁でもないし、革命指導者の支配が何十年も続くこともなかった。

佐藤　維新の三傑といわれた西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允は明治十年前後に相次いで世を去っている。

山内　そもそも「三傑」という言葉が示すように、明治政府のシステムは、はじめから薩長を中心とした合議制だったのです。それが旧幕府も含めた超藩的な岩倉使節団を可能にした理由でもある。

佐藤　もし明治政府が、たとえば大久保利通の独裁体制だったら、彼が長期海外視察を行うことなど不可能です。連合政権だったから、権力機構の半分が外遊し、後の半分が国内統治を進めるという離れ業が可能だった。

山内　その通り。留守政府の意味と存在も大きいのです。西郷はじめ、長州では財政通の井上馨や陸軍建設者の山縣有朋、土佐の板垣退助、肥前の大隈重信、江藤新平、副島種臣、大木喬任といった代表的な人材が日本に残り、学制発布や初の全国戸籍調査、太陽暦への切り替え、徴兵令、地租改正といった実務的な改革を着々と行っていました。田畑永代売買禁止令を解いて、正式に土地を私有できるようにしたのもこの時期ですね。

ただ留守政府の内実をいえば、西郷が残った薩摩は統制がとれていたけれど、木戸、伊藤を欠く長州はやや弱体化していた。その間隙を縫って、巻き返しを考えたのが肥前の江藤新平で、司法卿として井上馨の汚職を暴いたり、山城屋事件（長州出身商人が無担保で陸軍省から巨額の資金を借り、投機に失敗した事件）が起きて山縣有朋を失脚させたりと反薩長の派手な動きをみせた。そこで、山縣や井上を救うことで政府のバランスを維持させたのが西郷だったのです。

幕末維新の「合議体制」

佐藤　少し話が遡りますが、なぜ明治維新においては圧倒的な指導者が出てこなかったのでしょうか。

山内　幕末から明治維新にかけて重要な政治思想として、公議輿論という考え方が出てきますね。徳川幕府だけにまかせていても駄目だから、みんなで話し合って決めよう、というのがそもそものスタートだった。

参与会議がその例です。これは、文久三年の八・一八クーデターで長州藩など尊王攘夷派が朝廷から追放され、公武合体派の土佐藩主山内容堂が熱心に推進し、有力諸侯が朝議参与として、隔日に京都で国政を議した合議制会議でした。徳川慶喜はこの会議の主導権を握りたかったのですが、とくに薩摩の島津久光の反発があってうまくいかず約二カ月で解体してしまった。そこで徳川を棚上げにして、山内と島津の他に福井の松平春嶽、宇和島の伊達宗城を含めた四侯会議が出来上がります。ここで大事なのは、この時点ですでに誰か一人の独裁者が治めるという考えは消え、集団的リーダーシップが前提になっているということです。参与会議も四侯会議も、形式だけを見れば十九世紀後半のムハンマド・アリー朝の「諮問議会」にも通じますが、エジプトではあくまでも君主が超越的に権威を行使し、幕末日本と比べると独裁度が高い。

佐藤　そこで私が連想するのは、チェチェンの長老会議です。あそこはいまでも多数決ではなく、満場一致方式の、長老によるコンセンサスで決定する。そして、外敵が迫ったときだけ、征夷大将軍的なリーダーを置く。興味深いのは、その場合、腹の中では反対でも、自分が少数意見だとわかったら黙ったまま、多数派に同意を表明して満場一致にもっていく。しかし、この方式だと、どこに権力の中心があるのかわからない。

山内　まさに四侯会議も穏やかな集団的リーダーシップを目指したのですが、外圧の厳しさが高まる中で、公武合体や幕権尊重といった曖昧なやり方では処理しきれなくなる。さらに変革運動の担い手が下級武士に移っていく中で、はからずも倒幕、廃藩置県のような過激な変革に導かれていったというのが実像でしょう。

では、島津や毛利など雄藩の諸侯たちが実権を失い、

西郷、大久保、木戸らに主導権が移ったときに、彼らが強権的なリーダーとなったかというと、そうでもないのです。むしろ西郷ら政権を主導するリーダーと、その配下に位置するはずの実務的エリート、肥前の大隈や江藤、長州の井上馨ら、少し世代を下って伊藤博文や山縣有朋らとの差がはっきりせず、藩間や藩内のグループ間での合従連衡が行われていく。

エリート育成と国家のかたち

佐藤　今のお話は組織論として非常に興味深い。第一段階として、雄藩の諸侯たちという、そもそも合議志向の強い殿様がリーダーとして現れる。しかし、うまくいかなくなって、本来なら、それを補佐するエリートだったはずの西郷、大久保ら下級武士たちがリーダーとなる。これが明治維新。第二段階ですね。ところが新しくリーダーとなった下級武士たちは、きちんとしたキャリアシステムを経ていないから、リーダーとエリートの境も曖昧だし、エリートを育成する仕組みも整っていない。

だから岩倉使節団においても、実務は幕府系のエリートに頼らざるを得なかったのですが、面白いのは、岩倉使節団に同行した多くの留学生から「次世代」のエリートが育っていったことです。金子堅太郎や牧野伸顕、アメリカで鉱山学を学び、三池炭鉱の経営に成功して三井財閥の総帥となる團琢磨、「東洋のルソー」と呼ばれる民権思想家となる中江兆民、腹心として山縣有朋を支えた平田東助、女性教育をリードした津田梅子。さらには、アメリカに密入国していた新島襄が、木戸に見出され通訳として随行することとなります。

新島はいわばもうひとつの明治維新を生きた人物でした。幕末、日本が列強に滅ぼされるかもしれないという状況のなかで、アメリカの内部に入り込んで、その内在論理を学ぶ以外ない、と命懸けでアメリカに渡ったのです。その結果、新島が出した結論とは、欧米と遜色ない人文系に強い大学をつくらなければならない、ということでした。それもミッションスクールは欧米の植民地化になってしまう、あくまでもキリスト教の精神を持った日本人を育てるのだと、日本語での教育にこだわった。

山内　佐藤さんが言われたエリート集団の育成に最も熱心だった明治のリーダーは、伊藤博文でしょう。彼は帝国憲法と帝国議会をつくり、政党まで立ち上げた。しかし、それらと同じくらい力を注いだのは、帝国大学など大学制度の確立でした。国家のシステム、ステートクラフト（国政術）とは何かを勉強した伊藤は、憲法や議会を維持運営できる人材が最も重要だと気づいたのです。そして明治十九年、帝国大学を設立する。これは完全に国家エリート養成のための大学でした。

佐藤　そこで行われたのはいわばエリートの促成栽培ですね。日本中からとにかく記憶力のいい若い人材を集めてきて、法律を覚えさせる。そして、行政や司法の現場に次々と送り込んだ。

ちなみに明治十四年の政変で失脚した大隈が、翌年、設立したのが東京専門学校、後の早稲田大学です。福沢諭吉の慶應義塾、新島の同志社とともに、政府以外のエリート養成機関ができたことは、日本の「民間」を育てる上でとても大きかったと思います。たとえば中国にも私立大学はありますが、エリート養成は圧倒的に官立が担っている。「誰がエリートを育てるのか？」は国家にとって重大な問題なのです。

「公議輿論」の重要性

山内　もうひとつアジアの開発独裁と明治維新には大きな違いがあります。リー・クワン・ユーにしても、鄧小平にしても、アジアにおいてはとにかく経済成長だけが目標とされ、経済発展によって全てが正当化された。

佐藤　鄧小平の有名な白猫黒猫理論ですね。「白い猫でも黒い猫でも鼠を取ってくる猫がいい猫だ」という。

山内　しかし、明治維新の目的は最初からひとつではないんですね。簡単に言うと、「富国強兵」と「公議輿論」の二つが最初から目標として掲げられていました。このうち、「富国強兵」はそのまま開発独裁のスローガンですが、その一方で、広く議論を興していく「公議輿論」、これは帝国議会設立の要求につながり、大きくいえば人々の政治参加、いわゆる民主化を志向するものでもある。これが、木戸孝允ら長州派によって早い段階から唱えられているのです。

佐藤　帝国議会を開こうという流れと、帝国憲法をつくろうという流れは、本来、別々に存在した、ということですね。これは明治政府のもうひとつの大目標である、不平等条約改正を考えてみるとわかりやすい。

日本と条約を結びたい諸外国にとって、議会があろうがなかろうが関係ありません。しかし、憲法制定は決定的に条約改正と関係する。それは法治国家である証拠だから。つまり欧米諸国からすると、アジアの開発独裁下で民主化なんて進んでいない国でも、きちんと国際的なルールを守って、法律にしたがって商売してくれればいいわけです。

山内　その通りです。条約改正を行うために、当時の日本に課せられたのは三つの改革でした。すなわち行政改革、税制改革、そして法制改革。それが果たせてはじめて国際社会のメンバーとして認められ、治外法権が撤廃されて関税自主権が戻ってくる、というわけです。

佐藤　しかも、関税自主権の獲得は、自国経済に直結していますね。税率を自分で決められなければ、自国産業の保護もできません。そう考えると、憲法制定はまさに「富国強兵」と結びついた話だった。

かつて元外務省アメリカ局長の故吉野文六氏が面白いことを言っていました。「そもそも議員会館なんて、当時はなかった。あれは戦後になってできたんだ」と。官僚が議員会館に説明に行くこともなかった。戦前の国会、国会議員の存在感のなさをよく表していると思います。

山内　かつては宮中序列にしても、親任官、勅任官の序列が高いのですね。親任官というのは文官なら大臣以上、大審院長（いまの最高裁長官）、特命全権大使、それから東京都長官や朝鮮総督や台湾総督など。帝国大学総長は低くてせいぜい親任官待遇として扱われることもありました。陸海軍の武官ならば大将以上。中将、少将は勅任官です。もし中将が参謀総長や軍令部総長、師団長、司令長官などにつけば、役職に就いている間は親任官として遇されるのですが、国会議員はそれよりも低かった。

皇室儀制令による宮中席次というのは面白くてね、貴族院と衆議院の議長でさえ、第一階第一二といって、大将や大臣の下に来る。国会議員はもっとひどく、第四階第三九といって男爵や本省次官・局長の下に来る。今の国会議員なら、宮中で目をむいて怒り出すでしょう（笑）。

佐藤　簡単に言うと、下に「閣下」がつくのが親任官なんですね。

山内　そう。実は、戦前には（特命全権）大使というのは十人いるかいないか。あとは基本的には公使。中国でさえ途中までは中華民国公使だった。戦後は大使の数がインフレになりますが、最近まで外国で自分を「閣下」と呼ばせていた大使や総領事もいました（笑）。

佐藤　今は変わりましたが、私が外務省に在籍した当時は、便宜供与表をみると、国会議員は、中央官庁の局長と同格だったんですね。県知事に至っては、官庁でいうと課長級。これは戦前、知事は任命制で、内務省の課長級のポジションだった名残りなんです。最近改められて、国会議員が上になりましたが。

山内　いずれにしても、明治維新では富国強兵、議会と政党の設立、憲法制定などの複数の目標を同時に追求

しつつ、政策の重点や情勢の変化に応じて、その時々のリーダーが入れ替わり、柔軟に対応できた。それがあの時期を生き抜けた大きな要因だったと思うのです。

征韓論争　真の対立軸

山内　では、いよいよ西郷・大久保の征韓論争に入りましょう。明治初期の政治は、一人が突出することなく、対立が生じた際には、他を味方につけ、多数派が主張を通すという構図でした。ところが、征韓論だけが大きな例外となってしまった。もともと朝鮮の李王朝が明治新政府との国交を認めず、排日の気運を高めていったのに対し、居留民保護のために派兵を主張したのは板垣退助でした。それに対し、西郷は自ら朝鮮に渡って交渉すると唱え、留守政府がこれを承認したところに、岩倉使節団が帰国。大久保、岩倉がこれに反対したのです。

佐藤　西郷・板垣の外征論と大久保・岩倉の時期尚早論が二対二でぶつかり、身動きがとれなくなってしまったわけですね。

山内　言うまでもなく、西郷と大久保は鹿児島の加治屋町で幼少時代から兄弟のように育った朋友で、ともに革命を成し遂げた最も信頼しあう同志でした。では、なぜここまで対立が深まったのか。それは「富国」と「強兵」の対立だったと思うのです。岩倉使節団に参加して、イギリスのリバプールやシェフィールド、マンチェスターといった産業革命の地を見学した大久保は、富国強兵、殖産興業を、その政治目標として掲げ、その感激を西郷に書き送っています。大久保もまた日本の軍事力を強める「強兵」に異存はなく、朝鮮外交に対しても、最初は武力派遣を支持していました。この時点では、西郷と大久保は、問題意識を共有していたはずです。

佐藤　問題は両者のバランスですね。国が富み、工業生産力を高めなければ、軍隊の強化などできない。「富国」が「強兵」に優先する。これが大久保の立場です。

山内　その通りです。新政府ができ、海外列強と対峙するという重要な節目にもかかわらず、それを支える財力がない。税制度も確立されていないので、税収も乏しい。憲法、議会、そして官僚制度の整備、どれをとっても膨大な予算が必要です。とても外に攻めていける状況ではない、と大久保は判断しました。

それに対し、西郷は、富国と強兵は同時にできるし、また、しなくてはならないという考えでした。その背景となったのは、廃藩置県で職を失った大量の武士の失業と雇用の問題です。さらには、不満を募らせた武装集団

が暴動を起こしたら、どうやって収めるのか。実際に、西郷下野後、大きな士族の反乱があいつぎました。西郷の答えは、その力を「外」に向けるしかない、という外征論でした。朝鮮半島や東アジアで、武士集団を使うことで、彼らの不満も抑え外交を補うこともできる。

理屈としては双方に言い分があるのですが、結局は西郷が敗れ、下野を余儀なくされます。その理由は簡単で、やっぱり外征するだけの原資がなかったのですよ。つまり、政府予算の取り合いのなかで、多大な費用を必要とする外征派に反対して、富国派に憲法派、議会派も賛同すると一対三の流れができていったのです。

佐藤　この時期の日本経済を考えるときに、もうひとつ頭に入れておくべきは当時の農業の生産性の低さです。二十世紀を迎える前後に化学肥料が実用化されるのですが、これによって農業の生産性は飛躍的に向上するんですね。まだ明治初期は安定的かつ大量に農作物を供給できる態勢ではなかった。土地の私有化さえ、地租改正によってようやく実現したばかりで、土地全般に関しての近代的な制度もできていなかったのです。

山内　それは社会経済史的に重要な論点ですね。この時期、新政府が最も恐れたのは百姓一揆でした。江戸時代の米を納める物納制から、全国統一の金納制に切り替えたために、農家は米価の変動リスクをも背負わされます。そこで地租を低く設定したために、地主は富むのですが、小作農の収入は低レベルに固定され、税収もまた乏しくなるという苦しい状況にあったのです。

佐藤　征韓論争は経済的にみると、いわば外征によるケインズ主義（失業対策）と財政重視論・重商主義論の対立でもあったわけですね。

西郷の変質

山内　大久保と対立した西郷は、鹿児島に帰りますが、失業した士族たちに担がれ、西南戦争への道を進んでいきます。その様子をうかがえる貴重な史料を残したのが、やがてイギリス公使になる若き日のアーネスト・サトウです。このサトウは文久二（一八六二）年に通訳生として日本にやってきて二十年あまりを過ごして、明治二十八（一八九五）年に公使として再来日しており、英国外交史で最大の日本通になるのです。

佐藤　非常に優れた観察眼をもった外交官ですね。

山内　サトウは本当に西郷が好きだったようで、幕末から明治維新にかけてしばしば訪ねてはいろいろな議論を交わす仲でした。それがまさに挙兵し、出陣する直前

の西郷に会うために、鹿児島まで行くのです。ところが、そこでの西郷は、幕末に自由闊達に政治外交を論じた人物ではなかった。西郷がサトウの滞在先を訪ねてくると、取り巻きが五、六人ついてきて、離れようとしない。西郷と一緒にサトウの部屋に入ろうとするので、西郷が叱責しても玄関や階段の踊り場、甚だしきは部屋のすぐ近くに残って聞き耳を立てようとする。

佐藤　もちろん西郷を警護しているのでしょうが、蜂起を決意した部下たちが西郷を自分のコントロール下に置こうとしているのですね。

山内　そこまでして直に話してみると、西郷は別に大した話をするわけでもない。それで、サトウは失望して、内乱が起こり帰京すると勝海舟を訪ねるのです。すると勝は、「大久保と黒田（清隆）を辞職させたら内乱は終わる」と答えるのですね。そして、今の政府は長州人と長州出身者の助けを借りている薩摩人から成っており、それが薩摩士族と戦っているのだ、と分析する。

佐藤　その遺産が靖国神社ですね。靖国神社は幕末の志士たちに始まり、明治政府に貢献した死者を祀る、いわば長州の作った神社です。だから、西南戦争で賊軍となった西郷は、靖国には祀られていない。

山内　興味深いのは、西南戦争の翌年、大久保が紀尾井坂で暗殺されたとき、サトウが日記に「大久保は外国人の助言を求めたり、友情を深めたりするつもりはなかった」と淡々と記していることです。これは、西郷との対比でしょう。西郷とは友情を深めたが、大久保はそうではなかった、と暗に語っている。

また西南戦争の翌々年に『薩摩反乱記』という本を出したオーガスタス・マウンジーというイギリス公使館の書記官も、新政府は西南戦争や神風連の乱などで士族階級を抹殺しようとしている、その一方で、彼らから家禄を奪った新政府の官僚は高給をむさぼり贅沢三昧をしていると指摘している。マウンジーのように外国人にも、西郷の主張に共鳴する人がいたんですね。

佐藤　革命政府と腐敗の問題では、ソ連崩壊時、そのシナリオを書いたブルブリス国務長官から、「佐藤、いま世の中には三種類のエリートがいる」と言われたことがあります。それは、ソ連全体主義体制の古いエリート、混乱期だから偶然出てきたエリート、そしていまはまだ成熟していない未来のエリートだと。一番目と二番目は狼で、三番目が羊。あまり狼がお腹をすかせると羊を食ってしまう。だから、羊が育つまで狼を腹いっぱいにしておかないといけない。古い時代のエリートと混乱期のエリートをおとなしくさせておくために、一定の利権

や腐敗も許容し、コントロールするのが、われわれ偶然のエリートの仕事だ、なぜならわれわれには未来をつくる能力がないのだから、と言うのです。

明治初期における高給取りの役人たちは、まさにこの偶然のエリートだったわけですね。

山内　「努力して到達する」というのがフランス語のパルヴェニュ（成り上がり者）の語源なのですが、明治新政府の高官になった者には、先輩の引きや死によって苦労せずにパルヴェニュになった者も多いのです。

権力者たちの健康問題

佐藤　もうひとつ、サトウが証言している西郷の変質を理解する上で重要だと思うのは病気の問題ですね。当時、西郷はリンパ系フィラリア（寄生虫の一種）で下半身が異常に腫れあがっていたといいます。耐え難い痛みを抱えている人間は、どうしても判断が鈍ってくるのと同時に、行き場のない怒りに襲われるんですね。だから、過激な結論に飛びつきやすくなる。

山内　権力者の健康というのは、歴史と個人の関係を考える上で、非常に重要なテーマですね。世界史で有名なのは、痛風と痔に苦しんでいた「太陽王」ルイ十四世で、彼の痔瘻の進行にしたがって、いったん広がった領土がどんどん小さくなってしまうという、歴史家ジュール・ミシュレの興味深い分析があるほどです。

西郷に話を戻すと、彼は幕末からしばしば体調不良に悩まされましたが、征韓論争当時は一日に数十回もトイレに通わなければならないほどの深刻な下痢に見舞われていた。そのために重要な会談を欠席せざるを得ないほどでした。体調不良の原因はいろいろと推測されていますが、その根本は尋常ならざるストレスでしょう。慢性的な下痢といえば、大久保、木戸孝允もそうだった。要するに、明治初期のリーダーはみんな何がしか病気に罹っていたわけです。

佐藤　ストレスと免疫力とは相関関係がありますね。強いストレスに晒され続けると、ふだん感染しない感染症に罹ったり、発症しないものが発症したりする。

山内　しかも歴史の皮肉というべきなのは、幕末から維新にかけて大久保、西郷が薩摩藩のリーダーとして浮上していくきっかけにも、病気の問題が絡んでいることです。

というのは、幕末において、薩摩の藩論を本当にリードしていたのは、家老の小松帯刀でした。彼は、藩主茂久の実父・島津久光をリーダーとして戴きながら、藩政改革、倒幕運動、さらには武器商人グラバーや英国公使ハリー・パークスとも交流するなど、まさに八面六臂の活躍を見せるのですが、彼は長年「足痛」を患っていた。これは現在の痛風ではないかと推測されますが、ついに痛みで動けなくなります。慶応三（一八六八）年十二月、京都で開かれた小御所会議に行かれなくなった。このとき、小松の代理となったのが、大久保利通なのです。これが西郷や小松に伍して大久保が台頭する大きな契機となったといえるでしょう。

佐藤　この小御所会議で、王政復古の大号令が発せられ、倒幕路線が確立するんですね。

山内　実はこのとき、島津久光もリウマチか痛風によって身動きがとれず、小御所会議には出ていないのです。小松も久光も倒幕穏健派だったので、もし彼らが前に出ていたら武力倒幕でない形で進んだ可能性も否定できない。久光の不在により、倒幕急進派の西郷が前面に出るわけですね。その意味で、病気は、この維新の激変期に非常に大きな役割を果たしたといえます。

さらにいうと、小松は明治三年、三十四歳という若さで早世してしまう。彼は旧幕藩体制でも家老というスーパーエリートでありながら、同時に革命家へと自己変革を遂げて、国と時代を変えた逸材です。政治的リアリズムと革命的ロマン主義を兼備した事例は、世界史的にもあまりないと思います。だから、旧体制との間の調整・交渉が可能な稀有な人材でもあった。

佐藤　熟練した国対委員長であり、幹事長でもあったというわけですね。

山内　さらには、実質上、維新政府の最初の外務大臣の役割も果たしていました。堺事件や神戸事件、パークス襲撃事件といった最も難しい案件は、みな小松が処理していますから。ここからは歴史のIFになるのですが、もし彼が維新後も健在だったなら、政治力学は相当に変わっていたでしょう。維新後、西郷・大久保を大いに悩ませたのは、実はかつての主君、島津久光との関係なんですね。ことに廃藩置県を断行したことで、久光は二人に強い怒りを抱いていた。もし小松が生きていたら、絶好の緩衝材になった可能性は高い。さらにいえば、西郷と大久保の関係が、西南戦争という最悪の形で決裂することもなかったはずです。

歴史を見るには、マクロな鳥の目とミクロなアリの目が必要だとしばしば言われます。今日は、征韓論争という近代日本の重大な分かれ目を、一方は新政府の経済というマクロ、一方は個人の病気という超ミクロな視点から論じたことになりますね。